学苑・初等教育学科紀要　No. 872　67～83（2013・6）

〔研究ノート〕

イタリア幼児教育視察レポート

――レッジョ・エミリアとピストイアの保育システムから得られる示唆――

永岡　　都・石井　正子

Italy's Early Childhood Education: An Inspection Report to Gain Ideas from the Educational Systems of Reggio Emilia and Pistoia

Miyako Nagaoka and Masako Ishii

Abstract

This paper summarizes information which the authors obtained through literature and on-site inspections of early childhood education in the cities of Reggio Emilia and Pistoia in the Italian Republic, with the aim of obtaining ideas for Japan's early childhood education and training programmes for teachers at Japanese kindergarten and nursery schools, which are in urgent need of reform.

The system of early childhood education that began after the Second World War in Reggio Emilia, a city located in northern Italy, is now called the Reggio Emilia Model. Ever since *Newsweek* described it in 1991 as the best, most innovative and most practical model in the early childhood education category, the Reggio Emilia approach has had a tremendous influence on early childhood education, not only in Europe and the US, but also in Japan.

We recently visited sites in the cities of Reggio Emilia and Pistoia that apply the Reggio Emilia approach to early childhood care and education, talked directly with teachers and administrators who put it into practice, and discerned that this approach is not an educational method, but rather, a community-wide comprehensive care and education system.

The process of reform which has been carried out in the two cities—establishing a care and educational system by identifying the development of the child from age 0 to 6 in a continuous fashion and stressing collaboration with the community, while enhancing teachers' skills through ongoing training programs—is, simply put, the pursuit of the best environment for a child to live in.

On the other hand, the outcomes of the dynamic practice of the Reggio Emilia approach show, in a variety of forms, that a child is not just a recipient of assistance and instructions, but that his or her presence has the power to activate the community and support society as a whole.

Key words: *Reggio Emilia*（*レッジョ・エミリア*）, *Pistoia*（*ピストイア*）, *early childhood education*（*保育*）, *early childhood care and education, teacher training programmes for kindergarten and nursery school teachers*（*保育者養成*）, *comprehensive care and education system in community*（*地域包括的保育者養成*）

1. はじめに

筆者らは，2013 年 3 月 23 日から 31 日まで，イタリア共和国北部のエミリア・ロマーニャ州とトスカーナ州のいくつかの都市を周って，イタリアにおける幼児教育，音楽教育および障害児教育の一

端を視察してきた。この地方は，質の高い幼児教育を進めていることで知られ，とりわけレッジョ・エミリア市の教育実践は，最も先進的な幼児教育のモデルケースとして世界的に有名である。

今回の視察・研修では，レッジョ・エミリア市とピストイア市のさまざまな教育施設―乳幼児センター[1]，幼児学校[2]，幼小連携の実験校，音楽学校[3]，教育研修施設等―を訪問し，現地の最新情報を収集することに努めた。イタリアは，伝統的に地方分権が強く，教育行政についても各自治体の裁量に任される部分が大きい。しかし，その一方で，1990 年代から教育省が学校制度やカリキュラムの改革を推し進め，2000 年以降，その成果が徐々にカリキュラム編成の自由化や教員資格の引き上げといった形で顕れつつある。教育改革の流れは世界的な潮流であるが，その中で北イタリアの先進的な幼児教育が何を目指し，どこへ向かおうとしているのか，その現状報告と考察を以下にまとめる。

2. イタリアの幼児教育と教育改革

レッジョ・エミリアとピストイアの教育について考察する前に，イタリアの幼児教育制度の概要を記しておきたい。

イタリアの幼児教育を支えているのは 3 カ月児～3 歳児を対象とする乳幼児センター（Asilo nido: Infant-toddler centre）と，3 歳児～6 歳児を対象とする幼児学校（Scuola dell'infanzia: Preschool）の 2 種類の施設である[4]。

乳幼児センターに入所するのは，いわゆる共働きの家庭の子どもであるが，その割合はイタリア全体で 12% にすぎない。女性の就労率が高いレッジョ・エミリア市でも 40% である[5]。実は，イタリアの女性の労働参加率はヨーロッパ諸国の中で決して高いとはいえず，3 歳未満の子どもをもつ母親の雇用率は 45% ほど[6]である。したがって乳幼児期の保育の大半は家庭で行われているといってよい。これに対し，3 歳以上の子どもが対象となる幼児学校には，特別な事情がない限りほとんどの子どもたちが通っている。

日本の保育園や幼稚園と異なるのは，乳幼児センターの運営に責任をもつのは州や自治体であるが，幼児学校を監督するのは，教育省（Ministero dell'Istruzione, dell'Università e della Ricerca）[7] であることだ。イタリアでは幼児期後半（3～6 歳）の保育を「就学前教育」として教育省に監督を一本化し，その教育目標についても『幼児学校，小中学校のカリキュラムのための指針（Indicazioni per il curricolo per la scuola dell'infanzia e per il primo ciclo d'istruzione）』という形で，初等教育の中に位置づけているのである。もちろん，公立・教会立（fism と呼ばれるキリスト教経営の施設が多い）・私立によって幼児学校の保育の質も違っているが，全体としては，北欧諸国と同じように，0～6 歳の保育に関しては，その教育的側面を重視する方向にある。幼児期後半の受け皿が保育所（厚生労働省管轄）と幼稚園（文部科学省管轄）の 2 つに分かれ，3～6 歳児の保育の場について保育所と幼稚園の一元化に苦慮する日本とはその点が大きく異なるといえよう。

また，2007 年に告示され，2012 年に改訂された『幼児学校，小中学校のカリキュラムのための指針』は，従来の『学習指導要領（Programmi ministeriali scolastici）』より拘束力の少ない「指針」という呼称を用いることによって，各学校で独自のカリキュラムを編成し，特色ある学校づくりを進めることを奨励した。これは，2000 年から始まった教育改革「アウトノミーア（教育の自立）」を反映したものであるが，国家財政の逼迫に伴い，地力のある自治体に教育行政を任せたいという国の思惑もあるようだ。もともと地方分権の強いイタリアでは，それぞれの地方や県でカリキュラム編成の方

針があり，さらに学校ごとの評議委員会（教師と保護者，ときには子どもも加わる）が教育課程（教科編成，時間割など）を話し合って決めるというように，日本よりかなり自由な形で教育実践が行われている[8]。

幼児学校の『カリキュラム指針』に目を向けてみると，全体のアウトラインを述べた後に「子ども，家族，保育者，学びの環境」と「経験の領域」の 2 つの大項目があり，「経験の領域」がさらに「自分と他者」「身体と動き」「想像・音・色」「説明することと言葉」「世界の理解」の 5 つの小項目[9]に分かれている。「説明することと言葉（I discorsi e le parole)」という項目には，かつて多言語国家であり，言葉の統一に苦労したイタリアならではの国語教育へのこだわりも垣間見える。

イタリアの幼児教育を支える教員養成についても述べておきたい。現在イタリアで進められている教育改革の主要な柱の一つが，後期中等教育の整理統合と，それに伴う教員養成システムの改革であった。イタリアにおける小学校教員と保育者の養成は，伝統的にカトリックの養成機関が担ってきたこともあり，養成コースは後期中等教育（日本の高等学校の課程に相当する）に置かれていた。就学年数も，普通科など他の後期中等教育のコースが 5 年間であるのに対し，小学校教員の養成校（Istituto Magistrale）は 4 年間，保育者養成校（Scuola Magistrale）は 3 年間であった。しかし，1997 年と 98 年に施行された法律により，幼児学校と小学校の教員資格が大学レベルに引き上げられ，教員養成は大学で行われること，学位の取得と同時に教員免許が与えられることが決まった[10]。これは，質の高い幼児教育や初等教育を確保するためにも，非常に適切な改革であった。ただ，レッジョ・エミリアのように，子どもたちの個々の学習に応じて活動を組織化し，方向性をもったプログラムを展開するような質の高い教育（保育）実践が，教員養成だけで培われるとは思えない。むしろ現場の教師たちに充分な研修と教育を保障することが，保育の質を支えているのではないかという印象をもった。これについては，後の項目であらためて触れることにしたい。

3. レッジョ・エミリアの幼児教育

レッジョ・エミリアは，ボローニャからローカル列車で西へ 2 駅，ブドウ畑が広がるエミリア・ロマーニャ地方の小さな市である。筆者らが訪れた 3 月末は，まだブドウの木に葉がなく，代わりにあちこちで満開の桜を見ることができた。この人口わずか 17 万人の地方都市が世界的に知られるようになったのは，今から約 20 年前，アメリカのメディアがそのユニークな幼児教育を紹介したのがきっかけである。日本では，2001 年に東京原宿のワタリウム美術館で「子どもたちの百の言葉展」[11] が開催され，大きな反響を呼んだ。ただ，レッジョ・エミリアの幼児教育そのものについては，「アート（造形表現）を中心とした創造的な表現活動による保育実践」という側面が強調され，それが個々の幼稚園や保育園を超えた地域全体の取り組みであるという捉え方はあまりなかったように思われる。

今回の視察では，市の北東部にあるローリス・マラグッツィ国際センター[12]を訪ね，ペダゴジスタ pedagogista（教育主事）によるレクチャーと，「光のアトリエ atelier raggio di luce」およびセンターに付属する幼小連携の実験校の見学を実施した。レクチャーでは，現在レッジョ・エミリアの幼児教育の責任者であるロレーラ・トランコッシ氏から 2 時間余りにわたって話を聞くことができた。市の教育予算や教育施設について具体的な数字を挙げての解説だけでなく，レッジョ・エミリアの教育理念について明快な言説が聞けたことは非常に有意義であった。以下，ロレーラ氏のレクチャーをもとに，レッジョ・エミリアの幼児教育の概要と教育哲学について要点をまとめていく。

3.1　レッジョ方式とはメソッドではなく，地域との連携，地域への貢献である

レッジョ方式の幼児教育を実践しているのは，公立の乳幼児センターと幼児学校である。ロレーラ氏によれば，その基本姿勢は，①地域の家族に対して応えていくこと，②新しいことに敏感であり，新しいことを恐れないこと，の2つである。

レッジョ・エミリアの幼児教育は，第2次世界大戦直後，がれきの中から市民のボランティアによって建てられた幼稚園から始まった。それはやがて7園に増え，1963年から市当局の管轄に入った。レッジョの幼児教育の基礎を築いたローリス・マラグッツィが活躍し始めるのもこの頃からだが，レッジョの幼児教育を他の地域の幼児教育と分かつものは，それがまず地域と密着し，地域のボランティアとして発展してきたことである。

レッジョの幼児教育には，地域の協力，地域への貢献という考え方が根底にある。ロレーラ氏が例に挙げたのは，「町を良くしよう」というプロジェクトである。0〜6歳の子どもたちが町のあちこちを見学する。訪問先は，図書館や公園のような公共の場所だけでなく，靴屋や美容院といった個人商店も含まれる。帰ってきた彼らは，自分たちなりに「解釈したこと」をさまざまな形で表現する。例えば，大人では考えつかないような個性的な形の靴や，店の看板などである。レッジョがユニークなのは，活動がこれで終わるのではなく，子どもたちの作品を今度は大人たちがアート，デザインとして受け取ることである。年に一度のイベントでは，子どもたちが作ったセラミックの靴が店に並べられ，子どもたちがデザインした垂れ幕や看板が店の入り口に掲げられる。市民たちはそれを斬新なディスプレイ，ユニークな広告として楽しみ，町中が祝祭の雰囲気に包まれる。つまり，子どもたちは地域社会のサービスを受け取るだけではなく，彼ら自身も地域に貢献し，社会参加しているのである[13]。レッジョ・エミリアが伝統的に培ってきた市民としての自覚や連帯感は，こうした大人と子どもの相互的な地域貢献活動を通して，しっかりと子どもに受け継がれていく。

ロレーラ氏はいわゆる「レッジョ方式」とは，シュタイナー教育やモンテッソーリ教育のような「メソッド」ではなく，「地域の連携」「地域への貢献」であるという。それは，個々の幼稚園や保育園の範囲を超えた社会的なプロジェクトなのである。

3.2　教育サービスは，子ども，保護者，市の財産である[14]

レッジョ・エミリアの幼児教育については，さまざまな公的サービスが提供されている。数字のデータからそれらを描いてみよう。

レッジョ・エミリア市の総人口は約17万人，そのうち0〜5歳児の割合は6%，9868人である（2011年の統計による。以下のデータも同様）。0〜3歳児4493人のうち，1805人（40.2%）が乳幼児センターに入り，待機児童はない。既述したように，女性の就労率が高いレッジョでも，約60%の乳幼児は家庭で保育されるのであり，イタリアの子育てがまだ家庭中心であることがうかがわれる。そして3〜6歳の幼児5559人のうち，4824人（86.7%）が幼児学校に通っている。

だが，レッジョ・エミリアのすべての乳幼児センターや幼児学校が「市立」というわけではない。実際には，28園の乳幼児センターのうち，市が管轄するのは12園で，残りは協同組合あるいはアゴラと呼ばれる親たちのグループによって経営されている。また，65園ある幼児学校のうち，市立は25園で，いわゆるレッジョ方式を実践している。残りは，21園がキリスト教の経営（Fism Infant-toddler centre），14園が国立で，いずれもレッジョ方式ではない。特に，伝統的にイタリアの幼児教

育と保育者養成に深く関与してきたキリスト教系の幼児学校は，独自の教育方針を守っている。（なお，その他の5園は，2園が私立，シュタイナー教育が1園，アゴラが2園でうち1園がレッジョ方式を採用している。）つまり，先進的なレッジョの幼児教育を実施している現場は，実はレッジョ全体の乳幼児センターや幼児学校の半数にも満たないのである。

レッジョ・エミリアの教育行政で最も驚かされるのは，その予算配分であろう。レッジョ・エミリアの2011年度の幼児教育の歳入総額は30,295,281ユーロ（日本円にして約32億円）。内訳は市の予算が22,315,000ユーロ（約25億円），保護者から5,564,305ユーロ，国や県からの交付金および寄付が1,291,751ユーロ，レッジョ・チルドレン[15]の収益が964,225ユーロとなっている。極端なのは，市の予算の15%が幼児教育に拠出されていることだ。ロレーラ氏によれば，他のことにお金をかけずに子どもたちに投資するという決断を市が下したという。

その結果，子ども1人当たりのコストが，月額平均で0〜3歳児で883ユーロ（約10万円），3〜6歳児で657ユーロ（約8万円）かかるのに対し，家庭が負担するのは，乳幼児センターの費用が211ユーロ（約2.5万円），幼児学校の費用が119ユーロ（約1.4万円）で，負担率はそれぞれ23.4%と18.33%，コストの大半を公的資金で賄っている計算になる。

レッジョ・エミリアにおける公的な教育サービスは，筆者らの目からすれば，かなり偏った大胆な施策と映るが，その基本にあるのは「教育サービスは，子ども，保護者，市の財産である」という考え方である。教育サービスは，子どもだけに向けられたものではない。それは，保護者に対して，働く権利を守り，ライフワークバランスに貢献し，保護者の役割をより深く考察する機会を与えるものなのだ。また，市は，教育サービスを通して，市民が統合する場を提供し，社会的なつながりを強化することに貢献する[16]。

重要なことは，投資を最大限に活かし，地域の要求に応えられるように，市のコミュニティ全体が話し合い，合意しているということだ。例えば，個々の乳幼児センターと幼児学校には「市と子どもを考える会」があり，保護者たちに乳幼児センターや幼児学校の教育プロジェクトに積極的に参加するよう働きかけ，教育サービスの質を維持するために仕事をしている。この会議のメンバーは，保護者，地域社会（コミュニティ），教員，職員，ペダゴジスタ（教育主事）によって構成され，3年ごとに「民主的」に選挙で選出される[17]。レッジョ・エミリアにおいては，教育サービスはただ受け取るだけのものではなく，継続的な話し合いを経て，コミュニティ全体の総意となるよう，常に努力が続けられているのである。

3.3　レッジョ・エミリアの教育哲学と方法論

レッジョ・エミリアの幼児教育について筆者らが最も関心があったことの一つは，現場の教師の力量をどうやって育てているのかという点であった。

レッジョ方式には，あらかじめ決められたプログラムやカリキュラムはない。教師は，子どもたちの何気ない言動ややりとりの中から彼らの関心がどこにあるかを観察し，そこから学びの可能性を見つけ出し，活動として組織し，方向性をもったプロジェクトを立ち上げていく。このような自由度の高い実践をこなしていくには，教師自身にもさまざまな能力や経験が求められる。

レッジョ・エミリアの教育実践において，「ドキュメンテーション」と「プロジェクト」がキーコンセプトであることはつとに聞いていた。ドキュメンテーションとは，子どもたちの行動やことばをメモ，イラスト，写真，録音，録画などさまざまな手段を用いて記録したもので，教師たちは子ども

たちと活動をともにしながら同時進行で作成し，子どもたちが帰った後で整理をし，活動の痕跡を振り返るのである（**写真 1**）。重要なことは，ドキュメンテーションの振り返り＝解釈を行う際に，つねに同僚と討議することである。教師たちは討議をしながら，子どもたちの活動がどのように継続していくか，仮説を立てて予測し，「プロジェクト」の進行に柔軟に対応していく。プロジェクトとは，個別の目標をもって計画される教育プログラムだが，レッジョ方式ではあらかじめ具体的なねらいや作業方法を決めておくことはせず，子どもから表現してくることや，教師とのやりとりを通して活動の方向を選択していく。

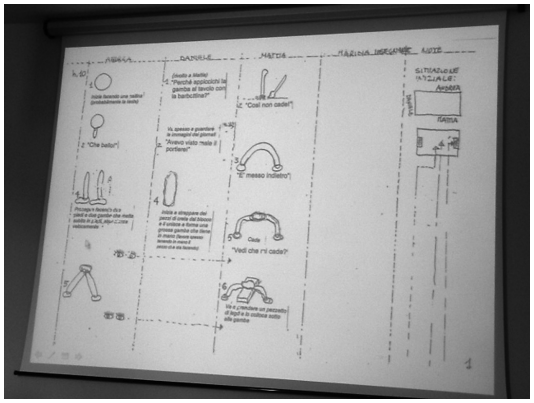

写真 1　ドキュメンテーションの一例

では実際にドキュメンテーションやプロジェクトが現場でどのように機能するのか，現場の教師に求められる力量とは何か，レッジョ方式，レッジョ・アプローチと呼ばれるものの本質は何か。ロレーラ氏の言説は，こうした筆者らの疑問に明快な解答を与えてくれるものとなった。彼女の言葉を要約しながら，レッジョ・エミリアの教育哲学と方法論を具体的にまとめてみる。

レッジョのアプローチとは，伝統的な「与える側から受ける側への一方的な関係」ではない。教師が「これが真実かどうか」疑問をもって，子どもと一緒に解決していこうという姿勢が重要である。教育活動において「プロジェクト」を立ち上げるきっかけは，「子どもが何をしたいか，何を必要としているか」を知ること，そしてどの疑問によってプロジェクトを「オーガナイズ」するかを判断することである。

音楽を例にとると:（教師が子どもと）リズムの実験をしてみたいと思う。子どもたちが初めてしゃべりはじめた時，それは歌のように聞こえる。子どもは生まれた時から，既に音楽的だ。この声を使って何かできるのではないかと発想していく。つまり，教師たちは理論をもっているが，3 歳児に大人の知っている音楽を押し付けてもうまくいかない。教師は，子ども一人ひとりがどんな反応をするか，どのように考えているか，確かめなければならない。教える前に，子どもたちが今何をどの程度知っているのか調査しなければならない。

すべての子どもに個性があり，人それぞれの時間があり，場所がある。それゆえ，教育は一人ひとりやり方が違って，個々に構築されるものである。これはデューイやピアジェの考え方だが，そこにもう一つ「関係性（相互の関係，社会的 social な関係）」も加わる。つまり，「**教育は，構築的で，社会的である**」といえる。

では，学校は何をすればよいのか。「**関係性，スペース，環境を与え，整える**」のである。（ここで，ディアナ幼児学校とヴィレッタ幼児学校のアトリエが紹介された。レッジョ・エミリアでは 1970 年代にマラグッツィによってアトリエリスタと呼ばれる美術教育の専門家が現場に投入された。彼らは保育室に隣接するアトリエで毎日子どもたちと顔を合わせ，子どもたちにアート面の教育をする。）アートの言葉は，障害のある子どもたちにも表現できる。しかし，大事なことは技術ではなく，技術をどのように使うかである。デザインするのに間違ったやり方はない。デザインが何を意味するか。自分の内側を表現するために描くのである。

教師の重要な資質とは「聞くこと」「観察すること」である。観察とは，作り上げた作品を見るのではなく，プロセスを見ることである。教師たちの「観察グラフ」はシステマティックなやり方で作成される。（一番上に子どもたちの名前を記した欄を作り，時間を追って，観察記録を付けていく。子ども同士が観察し合っている様子なども書き込まれる。ドキュメンテーションの方法の一つ。）子どもが課題に直面して立ち往生したとき，教師はどうするか。正解は「黙ること」。子どもがやることを奪うのではなく，尊重すること。ヴィゴツキーの最近接発達理論にある通り，子どもたちがまだそれを習得する段階にない時に教えるべきではない。

ドキュメンテーションは（パネルにして）完全に展示される。それは（教師のための記録だけでなく）子どもたちの会議の記録である。自分が何を創ったか，友達と情報交換し，それがメタ認知へとつながっていく。こういうものを準備するだけで，子どもたちは容易に議論に入っていく。

これらの仕事をするために，教師は週 36 時間働く。30 時間は子どもたちと過ごし，**あとの 6 時間は研究に使われる。それはプロとしての自分の教師の技術を磨くためである。**そこには，家族との面会や地域とのコミュニケーションも含まれる。

幼児学校にはさまざまなものが準備されているが，これらはすべてリサイクル品である。重要なのはアイデアである。建築家に閉じたスペースをデザインさせてはいけない。我々が幼児学校を作る場合には，建築家，設計技師，エンジニア，教師，アトリエリスタ，保護者代表が会議をする。

（レッジョ・アプローチの本質とは）子どもたちを信じること，子どもたちのやる気を信じること，聞くこと，援けること，見ること，人間の美しさを信じること，である。将来，それは戻ってくる。美について教えることで，あらゆる生について肯定的になる。

ロレーラ氏の言説で繰り返されたことの一つは「**教育は，関係から生まれる**」という理念である。この関係には，教師と子ども，教師同士，子ども同士，地域と学校，地域と子ども，教師と保護者，教師と専門家（ペダゴジスタ，アトリエリスタ），子どもと専門家（アトリエリスタ）など，あらゆる関係が包含されている。そしてその関係性を支えているのが，対話や議論である。このダイナミックな関係の中で，現場の教師は多くのことを学んでいく。レッジョ・エミリアの教育制度は，子どもたちの学びだけでなく，教師がいかに学んでいくかという今日的課題について，大きな示唆を与えてくれるものといえよう。

3.4　光のアトリエ

「光のアトリエ」は，ローリス・マラグッツィ国際センターの中ほどに設けられた体験学習型のアトリエ・スペースである。筆者らは研修プログラムの一環として施設の見学とアトリエリスタによる指導を体験することができた。ここには，光と影のさまざまな実験や研究がディスプレイされ，子ども，家族を始めとし，現場の教員，学生など多くの学習者を受け入れている。

写真 2　光と影のインスタレーション

「光と影」は，レッジョ・エミリアの幼児教育における重要なテーマの一つで，伝統的にライティング・テーブルや

OHP を保育室に持ち込んで，子どもたちの活動を促してきた。光と影が織りなすイリュージョン，コントラスト，色彩感覚，空間認識，想像力の広がりなどは，日本の保育環境にはほとんどないといってもよいコンセプトであり，非常に興味深く思われた。このアトリエの他にも，展示スペースがあり，ここでも光とスクリーンを利用した美しいインスタレーションを見ることができる（**写真 2**）。

3.5　幼小連携校

新設されてまもない「幼小連携の実験校」の見学は，子どもたちが下校してから行われ，実際に教室に残されたドキュメンテーションを見ることができた。ここでは特にこれまでのレッジョ・エミリアの紹介の中でもほとんど取り上げられることのなかった小学校での実践について触れておきたい。

実験校でのドキュメンテーションの撮影は許可されなかったが，ドキュメントを見ながら，小学校 3 年生を担当する教諭にインタビューすることができた。このインタビューの記録を読み返すと，この実験校で行われている授業の様子を具体的に想像することができる（**資料 1**）。

資料 1　小学校 3 年生の教室でのドキュメンテーションに関する説明と質疑応答の一部

これはビッグバンの勉強をやっているんですけれども，ビッグバンがあった後に，じゃあ世界はどんな風になったかっていうのを，子どもたちが想像力を働かせて絵を描きました。そして，地球の歴史を学ぶと同時に自分たちの歴史を学ぶということになりました。（中略）

最初は「小麦粉ができるまで」について学習しようと計画していました。これがその時の図です。小麦粉と水を混ぜて，小麦粉が沈んだのを見て，「なぜ？」と子どもが言いました。

「小麦粉がなぜ下にいくんだろう？」と言う子どもがいたら「小麦粉が重たいから下にいくんだよ」と言う子どもがいました。すると「水が重たいから，水が小麦粉を押さえてしまったんだ」と言う子どももいて，というわけで研究の課題を「小麦粉のでき方」っていうところから着眼点を変えて「強いものが勝つか，強ければエネルギーがたくさんあるのか」っていうテーマにかわってしまったのです。

そこで，「力」，「重さ」，「エネルギー」という言葉をキーワードに研究を進めていったわけです。

5 人ずつのグループに分けてそれで，研究内容を紙に書いていきましたが，ぐちゃぐちゃになって他の人が見たらわからないじゃないかということになって，内容を整理してまとめたものがこれです。表にしたらわかりやすいんじゃないかという話が子どもから出てきて，表にしました。さらに，この表をまとめたものがこれ。そうしたら，これをもとにして，学年全体でこのテーマに取り組むことになりました。これが，最終的にきれいにまとまったものです。

エネルギーとは自然のものと，電気のものと，科学的なものと，あとは核のものとがあります。

自然が電気に変わるというのはこうなります。土，風，太陽に気づいたんです。始めはこうだった，これをまとめてこうなった，これをきれいにまとめたら 4 つの原理になったということです。みんなで苦労して，3 カ月もかけてここにたどり着いたのです。

（質問）「教師のほうにこういったゴールのイメージはあったのでしょうか？」

そうではなく，すべて子どもによるものです。子どもがそこに導いていったのです。なぜなら最初は「小麦粉の実験」だったのですから。

これは，「動力」と「重力」の説明。力というのは「動力」と「重力」に分かれます。そして，まだこれは到達点（ゴール）ではない。実際到達点というのはありません。では地球は引力があるのに，なぜ月は落ちてこないのだというような問題が新たに出てきます。そしたらこの本を見つけて，この問題から発展して，今度は「惑星」の勉強に入っていきました。

（この後，ビッグバンの学習につながっていく）

2013 年 3 月 27 日　午後 4:00～　ローリス・マラグッツィ国際センター内の幼小連携校施設見学中に行った小学校 3 年担当教員へのインタビューの一部　質問者　石井正子　通訳　Kumiko Kawanishi

授業の特徴の一つは子どもたちが抱く疑問を大切にして，子どもたちが選んだテーマを研究することで進める問題解決型の学習方式を採っていることだ。教師は疑問に対する答えを教えるのではなく，答えを見つけるための研究の方法を教えるのだと述べる。子どもは自分の好奇心と探求心に従って，ここまでという限界を設けずに研究を発展させていく。およそ3カ月間，1つのテーマに取り組む。ただしこの方式は1日2時間程度しか行わない。これ以上は，子どもたちの集中力が続かず，疲れてしまうというのが理由だった。いわゆる，読み書きや算数に関しては，別途系統的な学習も行われているのではないかと推察されたが，この点についてはドキュメンテーション，配布資料，インタビュー記録からは明らかにすることはできなかった。

そして2つめの特徴は子どもたちがグループで協力して学ぶという点である。およそ5人を1グループにして，1つのテーマに取り組んでいく。子どもたちには人種の違いも，能力の違いもあるが，相互に助け合えることがたくさんあり，助け合うことでお互いの学習を深めていけると考えている。

幼児教育のシステムとして発展してきたレッジョ方式を小学校以降の教育にも取り入れようという実験は始まったばかりであり，この試みの成果は今後次第に明らかになっていくはずである。「最も革新的な実践モデル」として高い評価をうけたレッジョ方式の哲学を児童期以降の子どもたちの教育にどのように生かしていくのか，発達段階に合わせてどのようにアプローチを変えていくのか，期待をもって注目し続けたい。

4. ピストイア市における地域包括的保育システム

トスカーナ州ピストイア市はフィレンツェから33キロ北西に位置する人口9万の都市である。旧市街は1000年以上の歴史を有する城塞都市の歴史的建造物が立ち並び，ひと際高い教会の塔と美しい鐘の音が特徴的である。古くからの住民が多く，3世代が同居する家庭も珍しくない。城砦都市の周辺に広がる農業地帯では，植木，花卉等の園芸栽培が盛んで，「緑の街」とも呼ばれている。

教育センターにおいて，市の保育施策の組織と目標について説明を受けた後，乳幼児センター，幼児学校を視察した。ピストイアはレッジョ方式を積極的に取り入れた保育を行っているほか，1996年に「教育都市，子どもと青少年に優しい街ピストイア」というプロジェクトを立ち上げ，町全体を子どもが育つためのよりよい環境として整備し，子どもたちを大切にするためのさまざまな取り組みを行っている。

4.1 ピストイア市教育センター

ピストイア市の教育コーディネーターのドナテラ・ジョバニーニ氏によるピストイア市の保育施策に関する説明は以下のような内容である。

ピストイア市では1964年に0〜3歳を対象とする乳幼児センターを，1972年に3〜6歳を対象とする幼児学校をスタートさせた。そして，現在乳幼児センター10カ所，幼児学校12カ所が作られている。子どもの数は現在増加しつつある。ただし，イタリア人の子どもは減少し，周辺諸国からの移民の子どもが増加している。

また，「アレイバンビーニ」[18] という包括的なサービスを行う施設を何カ所かに設けている。「アレイバンビーニ」は色分けされ，色別にテーマが設定されており，「赤」は「家族と子ども」，「黄色」は「伝統的な物語」，「緑」は「自然とふれあうこと」，「青」は「芸術的なかかわり」がテーマになっ

ていて，各テーマにそって，教育学に基づいたさまざまなサービスが提供されている。

ここ何年かは，「協働」に重点を置いている。それは，保育者のグループによる「協働」であり，乳幼児センターと幼児学校等の施設同士の「協働」である。これは「プロジェクト 0〜6 歳」と名付けているもので，0〜3 歳までの乳幼児センターと 3〜6 歳までの幼児学校が別々に教育を行うのではなく，包括的なサービスを提供しようという趣旨である[19]。

もう一つ市が力を入れているのは家族とつながるということである。家族を巻き込んで教育に参加させるということが教育の価値を高める。幼児学校は年間の中で，たくさんのイベントを行い，家族をその中にどんどん巻き込んでいく。人間性を育てるために，家族を巻き込んで教育を創造的で質の高いものにしていくということである。環境としてそこにおいてある物，道具は子どもたちにとって非常に大切なものである。保育の場は子どもたちを集めるだけでなく，子どもたちが何かをしたいという気持ちを引き出し，やる気を起こさせる，そういう雰囲気をもった場であるべきである。

そして，保育環境の必要条件として，健康的であること，子どもたちの人生の場所であること（小学校に行くための準備の場所ではなく 1 日 1 日をフルに楽しんで生きる場所であるということ），勉強するだけでなく友だちと楽しく存在できる場所であること（友だちとの競争もするが，他の友だちに興味を持ち，協力をする場所であること）が挙げられる。子どもは常に探求したい気持ちをもつ「研究者」であるという発想を重視している。

4.2　ラゴ・マゴ乳幼児センター

ラゴ・マゴ乳幼児センターは 1980 年に作られた，ピストイアで最も規模の大きな乳幼児センターである（園児数 60 名）。0〜1 歳，1〜2 歳，2〜3 歳の 3 クラスに分かれ，それぞれのクラスはさらに 6 人から 9 人ほどの小さなグループに分かれて保育を行っている。

公園が隣接しており，自然の環境を生かした保育が可能になっている。自然の中で遊ぶこともできるし，採集してきたものを生かして創作することもできる（**写真 3**）。

各保育室にはさまざまな活動が用意されており，例えば，専門的な画材のそろった部屋（**写真 4**）や，楽器が置かれた部屋（**写真 5**），たくさんの絵本が並べられ子どもたちが自由に楽しむことのできる部屋（**写真 6，7**）もある。**写真 8**はレッジョ・エミリア方式の保育の中で特徴的に用いられる，「光と影」をテーマにした活動の部屋である。年齢の低い子どもたちが寝るためのベッドが並べられた部屋もある。

写真 3　自然の素材で遊ぶコーナー

写真 4　さまざまな画材が用意された部屋

写真 5　楽器が用意された部屋

写真 6　たくさんの本が用意されている絵本の部屋の本棚

写真 7　絵本の部屋では保育者による読み聞かせが行われていた

写真 8　OHP を利用した光と影の活動

写真 9　ペギー（右）とペギーの家

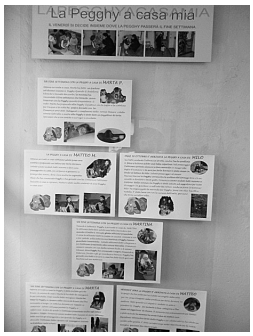

写真 10　ペギーに関するドキュメント

全体的に，ゆったりとした空間に子どもたち一人ひとりが希望に沿った活動が十分にできるように環境が整えられており，通常一つの部屋で遊び，食事，昼寝を行うことがあたりまえになっている日本の保育現場との大きな隔たりを感じた。

活動のために準備された材料はどれをとっても本格的なものであり，子どもたちの創造力を刺激し，表現力を引き出す工夫が施されている。1 例をあげると，保育室に「ペギー」と書かれた犬小屋が置かれていてそこに小型犬ほどの大きさの犬のぬいぐるみが置いてある（**写真 9**）。そばには，ペギーが乳幼児センターに来た時からの歴史が写真入りで紹介されていて，彼女が体験してきた数々の出来事や，その周りで起きた事件が報告されている（**写真 10**）。さらに子どもたちは週末になると交代でペギーを家に連れて帰り，一緒にさまざまな体験をしてくる。月曜日には，自分の家族とペギーが週末をどのように過ごしたのか，仲間の前で報告する。報告は，保育者の手によってドキュメントとなりペギーのライフヒストリーに新たなページが加えられる。写真入りでそこに残された記録はペギーの生活を生き生きとしたものとして形作り，命を吹き込んでいる。子どもたちは犬小屋と犬のぬいぐるみを材料にして，家族も巻き込んで，年間を通したストーリーを作り上げるという壮大なごっこ遊びを続けているのだ。

乳幼児期から一貫して一人ひとりの興味を大切にしつつ，創造の世界を共有し，表現力を高めていこうという試みは，年齢包括的な質の高い「教育」を行っていこうという意図が伝わるものであった。

4.3　コッチネッラ幼児学校

コッチネッラ幼児学校は，1980 年に開園し，2005 年に大規模な改修を終えている。3〜6 歳までの幼児が在籍し，保育時間は 9 時〜14 時までの子どもと，8 時〜16 時までの子どもがいる。

全体は，年齢別に3つのクラスに分かれている（ネコ組，クマ組，ライオン組）。1クラスは28人で，2人の保育者で担当している。

スペースの使い方は，子どもたちがグループで活動をすることを前提に，研究成果を生かして考えられている。1部屋1部屋はゆったりとした作りで，クラス全体の活動スペースの他，個別に座って活動するスペース（**写真11**），グループで話し合いをするスペース（**写真12**），表現活動をするスペース等に分かれている。

そして各スペースには，子どもたちの活動に必要なさまざまな教材が過不足なく準備されている。筆者らにとって特に印象的だったのは，表現活動のために用意された「表情のサイコロ（**写真13**）」やマスク（**写真14，15**）である。表現力を養うための表情豊かなサイコロは，すべて子どもたちが描いた絵が利用されている。劇遊びのマスクはイタリアならではの伝統的な仮面劇のマスクを模しており，このほかにも地域の伝統を大切にした教材が数多く用意されていた。

各部屋の入り口に，保護者のためのスペースが設けられており，迎えに来た保護者が子どもたちの園での様子を知り，生活を共有できるようにドキュメントを展示している。保護者同士が推薦したい

写真11　個別の作業をするスペース

写真12　グループで話し合いをするスペース

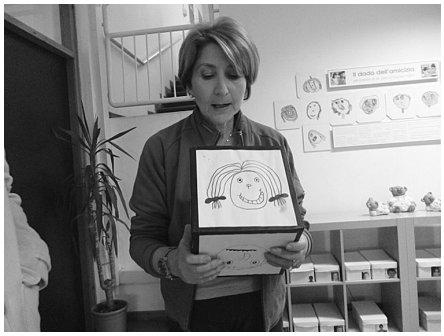

写真13　顔の表情のサイコロを使った表現活動について説明する保育者

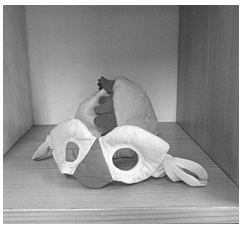

写真14　表現遊びに使われる伝統的なマスク

写真15　同左

写真16　自然をテーマにした創作活動の部屋

写真17　午睡のための部屋

本を並べ，交換して読みあうコーナーを設け，互いに交流を図るための工夫もなされていた。

2階は，それぞれの部屋が異なるテーマの活動スペースになっている（**写真16**）。子どもたちを美術館に連れていくことも頻繁にあり，美術館で見てきたものに刺激を受けて，この部屋で，創作活動が行われることもある。また，午睡のための部屋が設けられていて（**写真17**），3歳児と4歳児が使用する。午前8時から午後4時まで開いているので，午後4時までの間に午睡を必要とする子どもはこの部屋を使用する。

レッジョ・エミリアではかなわなかった実際の保育場面の見学，保育環境の写真撮影がピストイアでは許可され，また，子どもたちに出されている給食と同様の食事をとりながらさまざまな質問に丁寧に回答していただいた（**資料2**）。レッジョ方式の保育の中で，子どもたちが実際に生き生きと活動する様子は，保育の質の高さを十分に実感させるものだった。

資料2　コッチネッラ幼児学校での質疑応答

・ドキュメンテーションはどのような時間に作るのか

保育者には月に15時間はドキュメンテーションを作る時間として，子どもの保育時間とは別に勤務時間が保障されている。市の教育コーディネーターと連携を取りながら，学校独自のプロジェクトを進め，ドキュメンテーションを作っていく。

・幼児学校にアトリエリスタはいるのか

幼児学校の中にはアトリエリスタはいないが，アレイバンビーニを利用することで補っている。また，幼児学校で市のアトリエリスタによる指導が行われることもある。

・幼児学校同士で，どのようなプロジェクトを実施しているかといった情報交換をする機会はあるのか

ピストイア市でミーティングの場を設け，保育者同士の情報交換会を行っている。

昨年までは年に3回程度実施した。今年度は，移民の増加に伴って「外国人の子どもや保護者とどのようにつきあっていくか」ということが一つの共通テーマになっているので，もう少し頻繁にミーティングを行うかもしれない。

・子どもたちの送迎はどのように行われるのか

原則として，それぞれの保護者によって行われる。通学のための送迎バス等は無い。

・クリスマス等の行事は行われているか

クリスマスは，家族の行事なので，幼児学校では行わない。特に，クリスマスのような宗教行事はキリスト教以外の宗教を信仰する人への配慮からも幼児学校で実施するべきではないと考えられている。

・外国人の割合はどのくらいか

この学校では，非常に少なく3人程度である。ピストイア全体では多くの外国人がいるので，他の学校での割合はもっと高いはずである。

・父親の子育てへの参加状況はどのような様子か

母親が迎えに来られないときは，父親が来ることもあり，全く育児に参加しない父親というのはあまり考えられない。

・男性保育者はいるのか

この学校にはいない。ピストイア全体でも割合としては非常に少ない。

男性教員は，中等教育以上には多いが，小学校までは非常に低い割合である。

・障害のある子どもは在籍しているのか，また，そのような子どもへの支援について専門家からの指導を受けられるようなシステムはあるのか

障害のある子ども（難聴）が1名在籍しており，介助の職員が1名つけられている。特に専門家からの指導などは行われていない。リハビリテーションについては，別の機関で実施されている。

2013年3月26日　午後0:30〜　コッチネッラ幼児学校教員の案内による施設見学後の質疑応答の一部。質問者は主に永岡都・石井正子　通訳　Kumiko Kawanishi

5. まとめと今後の課題

5.1　イタリアの幼児教育の多様性と問題点

レッジョ・エミリアが，世界の幼児教育に与えた影響については繰り返し述べてきた。他方でイタリアは，今日でも日本の幼児教育に大きな影響を与え続けているマリア・モンテッソーリが「子どもの家」を作り障害児教育，幼児教育の土台を築いた地であり，アガッツィ姉妹が「母親学校」を開きアガッツィ思想の幼児教育を広めた地でもある。イタリア全体の中では，レッジョ方式を採用している幼児学校はむしろ少数であり，地域によって，また学校によって，多種多様な教育方法が選択されている。

この多様性は，すなわちイタリア国民の地方分権に対する意識の強さに他ならない。地方分権意識の強さは，住民一人ひとりがあらゆる問題を自分自身の問題として考え，主体的に答えを選択していくという民主主義本来のあり方を実現しやすい。しかし一方で経済的に豊かな地域とそうでない地域との間に格差を生じやすく，国全体の社会システムをよりよいものに変えていくという長期的展望や広域的な構想を持ちにくい。結果として一部の自治体がどんなにすばらしい実践を行っていたとしても，それがイタリア全土に普及することは難しい。

一方で，レッジョ・エミリアやピストイアがあるイタリア北部地域は経済的に比較的豊かであるがゆえに，近隣諸国からの移民が増え続けており，イタリア人の子どもは減少し，他民族の子どもが増えているというのが現状である。レッジョ・エミリアの実験校の教師は，人種や国籍の多様化は子どもたちの学習の内容をより豊かにするという見方をしていたが，レッジョ方式の根本にある伝統的に培われてきた市民としての自覚や連帯感を維持し，根気よく話し合いを続け，コミュニティ全体の総意で教育を作り上げていくレッジョ方式の実践を継続するのは決して楽な道のりではなかろう。

5.2　イタリアの幼児教育と音楽教育

レッジョ方式のプロジェクト活動が，造形活動・美術教育を中心に行われていることは，これまでに出版された文献や映像記録等からも推察されることであった。とはいえ，実際に現地に行って，幼児教育における音楽活動の実態を視察することも今回の研修の目的の一つであった。結果的に（レッジョ・エミリアの幼小連携校とピストイアの乳幼児センター，幼児学校を見学した限りにおいて），現場で歌唱や楽器の演奏はほとんど行われていないし，関係者への質疑応答からも「環境としての音への気づき」「多様な音の探究」以外の音楽プロジェクトがほとんど存在しないことが確かめられた。

とりわけ，ピストイアの乳幼児センターには，打楽器を中心にさまざまな民族楽器やサイズを縮小した本格的なドラムセットが置かれた部屋があったのに対し，レッジョ・エミリアの幼小連携校では，楽器すら見かけることはなかった。この点について，ピストイアのマベリーニ音楽院の校長に率直な意見を求めたところ，「実は自分も（幼児教育における音楽面の軽視について）非常に残念に思っている」という答えが返ってきた。マベリーニ音楽院には放課後子どもたちが通ってくる音楽クラスがあり，その教室にはオルフ楽器一式が整然と配置されていた。

日本の幼児教育には，かつて保育内容「絵画製作」と「音楽リズム」が制定されていたように，造形活動と音楽活動を同等に重んじてきた経緯がある。しかし，音楽的活動が幼児の発達においてどのような意味があり，幼児教育の中でどのように展開していく可能性があるのか，まだ充分議論されて

いるわけではない。レッジョ方式の幼児教育において，専門的な美術教師（アトリエリスタ）が子どもたちと日々関わりながら活動している姿を見ながら，日本の幼児教育関係者にも幼児教育における音楽教育の意味を早急に検証することが求められていると感じた。

5.3　インクルージョンの取り組み

イタリアは共和国憲法で保障されている平等な教育権に従い，0歳の乳幼児センターの利用から大学卒業まで，障害のある子どもたちに他の子どもと同様の学習機会が保障されている。今回のイタリア視察研修の目的の一つは，障害のある子どもたちのフルインクルージョンが実現されていると言われるイタリアにおいて，特別な支援を必要とする子どもたちがどのように教育を受けているのかを確かめることであった。また，日本の保育・教育現場で近年取り上げられることの多い「気になる子ども」すなわち明確に障害があるという診断を受けているわけではないが，集団生活への適応や，学習に困難を抱える子どもたちがどのように捉えられ，どのような支援を受けているのかという点にも興味があった。

しかし結果的に，今回訪問した幼児教育施設や学校においては，障害のある子どもたちがごく自然に他の子どもたちと一緒に活動しており，説明を受けなければどの子どもが支援の対象となっているのかわからなかった。また，子どもたちが非常に落ち着いて，安心した様子でそれぞれの活動に取り組んでいたため，特に「気になる子ども」を目にすることもなかった。

短期間の視察であったため，たまたま筆者らが特別な支援を必要とする場面を目にすることがなかっただけなのかもしれない。しかし，子どもたち一人ひとりを注意深く観察し，それぞれのメッセージに耳を傾け，十分なスペースと豊かな環境を与えることを重視するレッジョ方式の保育そのものが，すべての子どもたちへの十分な支援になっているという可能性があるのではないかとも感じた。

イタリアにおいてフルインクルージョンが可能になった背景と，いわゆる「気になる子ども」への対応については機会を改めて研究を進めたいと考えている。

5.4　日本の幼児教育への示唆

イタリア社会は，日本と同様にあるいは日本以上にさまざまな問題を抱えており，イタリアのやり方を真似ることが，日本が抱える問題の解決につながるわけではない。しかし，今回の視察を通して，レッジョ・エミリアとピストイアの実践や教育に関する考え方から学ぶべき点は数多くあった。日本の幼児教育が現在直面する課題の一つが，幼稚園教育と保育所保育の統合すなわち「幼保一元化」である。この問題に関して，イタリアにおいては3〜6歳の教育はすべて幼児学校で実施されており，保護者の就業形態にかかわらずほとんどの子どもたちが学校教育を受けている。さらに，レッジョ・エミリアやピストイアでは，0〜6歳までの教育を包括的な保育システムとして考えようという方向で乳幼児センターと幼児学校の連携が進んでいる。

日本が進めようとしている一元化と，ピストイアが進めようとしている包括的保育システムの大きな違いは，何を目的とした改革かという点である。日本とイタリアは合計特殊出生率がほぼ同じ水準であり，深刻な少子化という共通の問題を抱えている。しかし，レッジョ・エミリアでも，ピストイアでも常に語られるのは「子どもたちのために」という目的であり，子どもたちの発達を保障するよりよい環境を作るために，保護者を支援し，地域とつながり，町を活性化させる改革が進められてい

くのであり「少子化対策」という発想は語られなかった。日本では，保護者が働きやすいように保育時間を延長したり，保育所の定員を増やしたりといった改革が急速に進められつつあり，それは保護者にとっては有り難いサービスの拡大だが「子どもたちのために」という視点が置き去りにされているように思えてならないことが多々ある。0〜6歳の乳幼児を少子化対策としての「保育サービス」の対象として見るのではなく，今をともに生きるかけがえのない存在と捉え，子どものためのよりよい「教育環境」と質の高い「幼児教育」を考えるべきではないだろうか。

そして，質の高い幼児教育を求めるにあたって，レッジョ方式に見られる保育者の互恵的な研修の取り組みには学ぶべきところが多い。丹念に保育を記録し，自らの保育を振り返り，保育者同士で議論を重ねることで気づきと修正を積み重ねていく。また，いつでも身近に専門家がいて，保育に関する相談ができ，自分も得意な分野の専門性を磨き，専門家として他の保育者にアドバイスができるようにキャリアアップしていく。

これからの保育者養成においては，保育者としての基本的スキルとともに，保育現場で主体的に学び続ける力を育てていくことが重要な課題となるであろう。

注

1 Asilo nido の訳。日本の保育園との違いを強調するため，あえて英語表記の Infant-toddler centre から日本語に訳した。
2 Scuola dell'infanzia の訳。日本の幼稚園と区別するため，「幼児学校」と訳した。英語表記は Preschool である。
3 ピストイアのマベリーニ音楽学校。市立の音楽学校として 1958 年に設立された。建物は 18 世紀の貴族の館を保存修復した貴重な文化財である。
4 その他，家庭や女性，子どものニーズに応じて，子どもと保護者が一緒に通ってくる「子ども家庭センター」や 3 歳児未満の小グループに対する「教育サービス」など，ケアと教育を組み合わせたさまざまな「統合サービス」もある。『OECD 保育白書』明石書店，2011．413-414 参照。
5 2011 年の統計による。レッジョ・チルドレンの責任者の一人ロレーラ氏からの情報提供。
6 2004 年の統計による。『OECD 保育白書』，412 参照。
7 通称 MIUR。従来の MPI（Ministero della Pubblica Istruzion）から 2008 年に改称。
8 イタリアの小中学校のカリキュラム編成の実情については，横浜国立大学の中嶋俊夫氏から口頭で情報をいただいた。
9 2012 年に改訂された最新版の項目。中嶋俊夫氏の情報提供による。
10 『OECD 保育白書』，415-416 参照。
11 1988 年から世界各地を巡回した移動式展覧会で，子どもたちの作品とその完成に至るプロセスが，さまざまな文書・写真によるドキュメンテーション（記録）と作品の展示によって紹介された。レッジョ・エミリアの初期の活動の全貌を知ることができた。
12 チーズ工場の跡地を 1990 年に市が買い上げて作られた。レッジョ・エミリアアプローチのための総合施設。研究・研修施設の他，記録映像や記録作品の保管庫，ドキュメンテーションと作品の展示スペース，アトリエリスタが指導を行う施設，カフェテリア，レッジョ関連図書・グッズの販売スペース等がある。幼小連携の実験校も併設されており，地域の子どもたちが通学している。
13 レッジョ・エミリアの子どもたちが地域貢献したもう一つの例として，市のオペラハウスの緞帳のデザインがある。この活動の一部始終は，'Theater curtain: The ring of transformatios' 2002. という書物にまとめられている。
14 'Enrolment: Information from enrolment newsletters by the Infant-toddler Centre and Preschool System of Reggio Emilia Municipality' April, 2012. 1 参照。
15 1994 年，市民グループ，保護者，労働者，市当局の要望で設立された有限会社。市が 51% の株を保有している。研修施設の運営，展覧会の企画や図書の出版など，レッジョ・エミリアの教育実践を世界に発信している。
16 'Enrolment' April, 2012. 1 参照。

17 ‘Enrolment’ April, 2012. 2 参照。
18 アレイバンビーニ（Areebambini）地域の子どもたちのためにさまざまな教育的サービスを提供する拠点となる施設。日本の児童館に近い機能を持っている。乳幼児センターや幼児学校の子どもたちが，訪問して利用することもできるし，親子で利用することもできる。ただし，同じ色のテーマ施設は週に 2 回までしか利用することが認められないなどの制約がある。
19 前述したようにイタリアでは 0〜3 歳までの乳幼児保育を行う保育職員と，3 歳以上の幼児教育を行う幼児学校教員の資格が分かれている。しかし，ピストイアにおいては原則として大学を卒業した幼児学校教員の資格を持つ職員がどちらの施設にも採用されている。そして 0〜6 歳まで一貫した方針のもとに各年齢に即したプログラムが作られている。

引用・参考文献

秋田喜代美 (2003). レッジョ・エミリアの教育学 幼児の 100 の言葉を育む 佐藤学・今井康雄（編）『子どもたちの想像力を育む アート教育の思想と実践』東京大学出版会 73-92

C. エドワーズ，L. ガンディーニ，G. フォアマン（編） 佐藤学，森眞理，塚田美紀（訳）（2001). 『子どもたちの 100 の言葉―レッジョ・エミリアの幼児教育』世織書房

学習研究社（編）（2001). レッジョ・エミリア市乳児保育所と幼児学校 『イタリア／レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録 子どもたちの 100 の言葉』

藤原紀子 (2011). イタリアにおけるインクルージョンの変遷と 1992 年第 104 法 世界の特別支援教育，**24**. 67-77

J. ヘンドリック（著） 石垣恵美子・玉置哲淳（監訳）（2000). 『レッジョ・エミリア保育実践入門』北大路書房

星美和子・上垣内伸子 (2009). 子どもの発達にとって町とは何か―ピストイアの保育における環境としての町― 十文字学園女子大学人間生活学部紀要，**7**. 123-144

Ministero della Pubblica Istruzione (2007). *Indicazioni per il curricolo: per la scuola dell’infanzia e per il primo ciclo d’istruzione*

森眞理 (2009). イタリア―響き合う市民生活の展開―創造性と協働性を重んじるレッジョ・エミリア市に学ぶ 子どもの文化，**41**. 78-86

中嶋俊夫 (2012). イタリアの新しいカリキュラムとテアートロ教育にみる音楽表現の可能性―わが国の教育実践と関わって― 音楽教育実践ジャーナル，**9**(2). 131-142

中嶋俊夫 (2004).「イタリア共和国 」日本音楽教育学会（編）『日本音楽教育事典』音楽之友社 35-42

OECD（編著） 星三和子・首藤美香子・大和洋子・一見真理子（訳）（2011). 『OECD 保育白書―人生の始まりこそ力強く: 乳幼児期の教育とケア（ECEC）の国際比較』明石書店

オムリ慶子 (2007). 『イタリア幼児教育メソッドの歴史的変遷に関する研究―言語教育を中心に―』風間書房

Reggio Children (2002). *Theater Curtain: the ring of transformations, edited* by Vea Vecchi.

Reggio Children (2009). Rechild: Reggio children newsletter, Febbraio 2009

Reggio Children (2010). Rechild: Reggio children newsletter, Dicembre 2010

Reggio Children (2012). Enrolment: Information from enrolment newsletters by the Infant-toddler Centre and Preschool System of Reggio Emilia Municipality, April 2012

鈴木昌世 (2012). 『イタリアの幼児教育思想―アガッツィ思想に見る母性・道徳・平和―』福村出版

付記

本研究の一部は 2012 年度昭和女子大学学長裁量研究費（石井）の助成を受けて行われた。

謝辞

レッジョ・エミリア市，ピストイア市における教育，保育施設訪問にあたって，私たちの訪問を引き受けて下さった担当者の方々，丁寧にインタビューに答えて下さった先生方と子どもたちに心から感謝申し上げます。

また，横浜国立大学の中嶋俊夫教授には，最新のイタリア教育事情に関する情報提供と丁寧なご教示をいただきました。併せて御礼申し上げます。

（ながおか みやこ 初等教育学科）
（いしい まさこ 初等教育学科）